

心理学研究における「信頼」概念についての展望

教育心理学コース 水野将樹

Psychological Studies on Trust

Masaki MIZUNO

Trust is mentioned as one of the most desired qualities in many relationships. However, there has not been enough researches on trust. As first, this paper provided an overview of psychological studies on trust and then suggested classification of these studies into 2 major groups (one with 3 sub-groups) based on a type of trust; trust as a personal trait and trust as a trait of relationships. Having reviewed Japanese researches on trust according to this classification, the integration of studies was found to be important. In addition, a multi-dimensional approach and a distinction between trust and security are thought to be useful.

目次

1. はじめに
2. 信頼研究の概観
 - A. 信頼を個人内特性として捉える立場からの研究
 - (1) 「期待としての信頼」という観点の研究
 - (2) 「信念としての信頼」という観点の研究
 - (3) 信頼を個人内特性として捉えるその他の研究
 - B. 信頼を関係特性として捉える立場からの研究
3. 国内の信頼研究
 - A. 国内の実証的研究
 - B. 国内の記述的研究
4. 信頼研究の展望
 - A. 先行研究の問題点
 - B. 信頼概念の統合
 - (1) 個人内特性-関係特性の差異~複数次元からのアプローチによる統合
 - (2) 期待-信念の差異~安心概念に基づく統合

1. はじめに

「信頼」とは非常に耳慣れた言葉であり、日常生活の中でもしばしば用いられる。また、社会科学の諸領域でも社会生活における信頼の重要性が繰り返し指摘されてきている(例えば, Luhmann(1979), Fukuyama(1995))。心理学の領域においてもそれは同様だが、一方で「信頼とはあらゆる親密な関係において最も重要な望ましい性質の一つであるが、その重要性に比し

て信頼についての研究の蓄積は驚くほど少ない」(Rempel, Holmes & Zanna, 1985)という指摘がたびたびなされている。このように、重要性が指摘されているにも関わらず十分に研究されてきてはいない理由のとしては、Giffin(1967)が“somewhat mystical and intangible factor”と評しているような、信頼の多義性にあると思われる。

本論はこうした問題点を検討し、信頼概念を統合的に整理することの重要性を指摘するものである。その際、本論ではまず心理学領域における信頼についての研究を、信頼概念の捉え方の違いにもとづいて分類する方法を提案した。また、そうした分類に基づく先行研究の整理概観から、特に国内における信頼研究の今後を展望し、複数次元を用いた概念の統合、安心という概念の検討、という2点の重要性を指摘している。

2. 信頼研究の概観

前述のとおり信頼は非常に多義的なものである。先行研究に総じて言えることは、信頼を「社会生活や人格発達を理解する上でとても重要なもの」(Deutsch, 1958)として捉えている点であるが、それ以上の共通定義はなかなか見出しにくく、そのことが研究不足の大きな要因の一つとなっている。概念の定義を行う際、様々な言説を集めてその共通点を抽出する方法があり、実際にその方法での信頼定義に Barber(1983)の「自然的秩序および道徳的社会的秩序が存在することへの期待」という定義がある。しかし、信頼が本質的に多義

的である以上、それを簡潔かつ画一的に定義づけたところで、抽象的にすぎるため実際的にはあまり有効ではないといえる。事実、心理学研究においては信頼という広範な現象を何らかの観点から切り取って扱うことで、より現実的で有効な結論を導こうとする姿勢で研究が進められてきている。

こうした先行研究の分類については山岸(1998)や天貝(2001)によるものもあるが、それぞれの信頼概念は包含する範囲が異なっており、本論では新たに信頼をどのように捉えているかという立場や観点に基づく先行研究の分類を試みた。

先行研究を概観してみると、初期の研究を中心とする多くの心理学研究において、信頼を個人がある程度安定して持つもの(個人内特性)として捉えていることがわかる。一方で近年の関係性を重視する流れの中からは、ある個別の人間関係が安定してもつ性質(関係特性)として信頼を捉える新たな立場の研究も見られるようになってきている。ここで、信頼はあくまで主体によって認識されるものであるから、必ずそこには主体としての「個人」が関与する。その一方で信頼は何らかの対象に向けられるものであることから、その対象と主体との「関係性」も同時に関与する。つまり、個人と関係性という両方の視点が信頼の理解には不可欠だと考えられる。心理学領域で個別性と関係性の二側面を扱うことに関しては、例えばパーソナリティの二面性を扱った Gilligan(1982)などがあるが、本論では近年のこうした個別性・関係性という分類に準じ、A = 信頼を個人内特性として捉える立場と、B = 信頼を関係特性として捉える立場、という2つに先行研究を大

別した。

また研究の蓄積が多いAの立場については、その中で研究の方向性や信頼を捉える観点に差異が認められたので、Rotter(1980)や天貝(2001)を参考に下位分類をたてた。それが、信頼を個人が持つ「期待(expectancy)」と捉える立場(A-(1))、「信念(belief)」と捉える立場(A-(2))、そして、信頼を個人内特性として捉えてはいるが、期待・信念のいずれかに明確に分類できないもの(A-(3))という3つである。以上の分類は Figure 1 にまとめた。なお、A-(1)と(2)の、“expectancy”と“belief”という用語は Rotter(1980)に準じた。両者は、(1)がある条件下の対人場面における変数、相手からの反応についての予測などを含意した概念として信頼を捉えているのに対し、(2)では個々人が発達していく過程の様々な場面で影響してくる変数、具体的な反応というよりはより抽象的な確信や信じることを含意する概念として信頼を捉えている点に違いがあると思われる。それは、一つには社会や集団におけるダイナミクスやコミュニケーションの具体的なあり方に関心がある前者と、最終的には個人の人生に添った形での支援などを目指している後者の、学問的スタンスや人間観の違いによるものかもしれない。

A. 信頼を個人内特性として捉える立場からの研究

(1) 「期待としての信頼」という観点の研究

信頼についての先行研究の中で、研究が最も体系的に蓄積されているのがこの観点からの研究である。この観点の多くの研究に、社会的学習理論(social learning theory)をはじめとする様々な対人関係についての

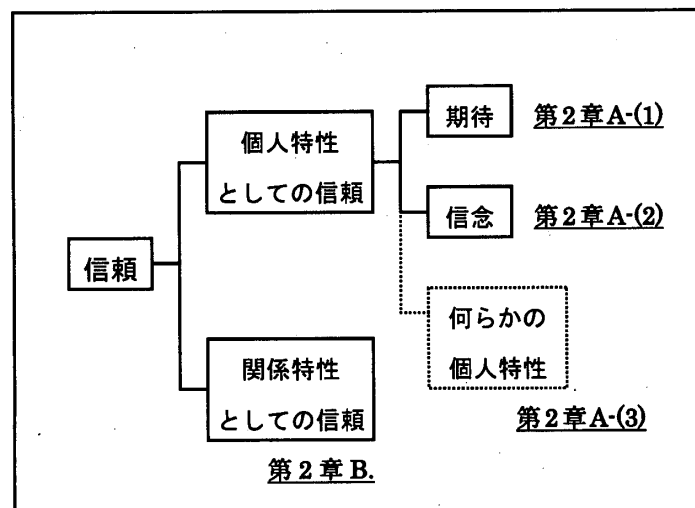


Figure1 信頼概念の分類枠組

背景理論があることも一つの特徴といえる。また、対人場面における信頼を特に扱うことから、しばしば“interpersonal trust”という用語が用いられている。この観点からの研究は社会心理学の領域を中心になされてきており、総じて社会や集団、更にその中で人間同士がなすコミュニケーションに関心が置かれている。従って方法論としては実験・調査に基づく仮説検証型研究が多く、そうした手続きを通じて得られた実証性の高い結果を用いて、対人コミュニケーションや社会システムに対する提言を行ってきている。

この立場では、信頼を「他の個人・集団が用いた言語・約束・話し言葉・書き言葉によって表された言説に対し、それに拠ることが可能であるという期待」(Rotter, 1967)として捉えている。その他の特徴として、この立場では何らかの場面を想定した状況的な個人内特性として信頼を捉えているものが多い。例えば、「協調や相互依存を要求する全ての社会的場面」(Cynthia & Walter, 1982)、「リスクのある状況下で、望ましいが不確実な目標を達成しようとしている場面」(Giffin, 1967)、などである。この場面については内容が「一貫していない」(天貝, 2001)という指摘もあるものの、全般的には山岸(1998)が指摘する「社会的不確実状況」という点では共通しているといえる。この点に関して Rotter(1971)は、自らの尺度が最も鋭敏に測定しうるのは、人が自分自身の一般的信頼以外に拠るべきものもない、曖昧で、新奇で、構造化されていない状況における反応であるとしている。

更に、場面状況の限定というのは、それは個別の一回的状況という意味ではなく、何らかの似たような一群の状況に限定するということである。実際、多くの研究においては「ある期待は、その状況下特有のものではなく、似たような状況における経験の総和からくるものである」(Rotter, 1980)という「般化期待(generalized expectancy)」を想定しているため、実験デザインとしては交渉相手と直接対面しないものが多い。なお、この立場では、信頼(=期待)する対象として様々な社会現象を想定しているが、殆どの場合には、対人的状況における「相手の意図」(山岸, 1998)がその対象となっている。

この立場による研究によって得られた知見についてだが、まず第一の成果として、Rotter(1967)や Wrightsman(1966)などによる信頼測定尺度の充実が挙げられる。現在も使われる多くの尺度はこうした立場の研究から作成されたものである。尺度生成が進んだことから、尺度を用いた因子分析によって信頼の因子

構造を研究したものもある(Kaplan, 1973; Chun & Campbell, 1974; Rotenberg, 1994)。これらの研究では、信頼が多様な要素から構成されているという点については共通しているものの、各要素についての見解は一致してはいない。これは一つには信頼の多義性によるものだろうが、同時に質問紙を用いる場合の方法論上の問題もあると思われる。その場合、予め研究者の側で用意した項目について因子構造を検討するため、研究ごとに結果が変動してしまいかねないわけである。

さて、この立場では信頼を対人コミュニケーションに関わる要因として重視していることから、対人コミュニケーションについての知見が豊富に得られている。その中でも最も多くの研究が蓄積されているのは囚人のジレンマという方法を用いて行われた人間の社会的行動についての研究である(Deutsch(1958), Wrightsman(1966), Tedeschi, Heiter, & Gahagan(1969), Tyszka & Grzelak(1976), Dawes, McTavish & Shaklee(1977), Yamagishi & Sato(1986)など)。この方法を用いた研究では、相手がどうでるか分からない社会的に不確実な状況下で人間がどう振舞うかを検討しているが、「一般的信頼が高い者ほど利他的行動をとる」(Tedeschi et al., 1969; Wrightsman, 1966)、「一般的信頼が高い人ほど、相手の意図を見抜く能力が高い」(垣内・山岸, 1997)、「社会的不確実性は相互のコミットメント関係(継続的な関係)の形成を促進し、結果的に信頼感を高める」(例えば、Kollock, 1994; 神・関谷・篠塚, 1993; 林・神・山岸, 1993)などの結果が得られている。

(2) 「信念としての信頼」という観点の研究

信頼を期待と捉える観点からの研究に比べるとこの観点から信頼を扱った実証的研究は少ない。しかし、信頼を重要な要素として含んでいる Erikson(1959)の漸成発達理論に関する研究などは比較的多くなされている。この観点の研究には、発達・臨床心理学の領域からの研究が多く、集団や平均値よりは個人に関心があるものが多い。

この観点では信頼を「絶望的な不安に押し潰されそうになったときには適切な慰めによって回復されるだろう」(Erikson, 1982)という信念、或いは「他者は善人であり、世界は本質的に慈悲深いものだという信念」(Rotter, 1980)として捉えている。また、こうした信念は個人の発達の過程における他者との関係の中で獲得されると考えられているが、信頼する対象を特に限定しておらず、例えば基本的信頼感(Basic Trust)であ

れば、その対象は自己と他者を含む様々な現象(世界)が信頼の対象になるとされている(Erikson, 1955; 1959)。

この立場の研究によって得られた知見は少ないのだが、記述的なものが多く、実証的で体系だった結論を導き出しているものはErikson(1955,1959)などしかない。そのEriksonも信頼についての理論ではなく、信頼を一つの重要な要素として取り込んだ理論を作っており、「信頼」が単独で扱われるのではないという点がこの立場からの研究の一つの特徴といえる。このように人間が社会生活を営む上で他者と関わったり、様々な感情や考えをいさぐ、そのような様々な要素との関わりの中にある一つの要素として信頼を捉えることは重要であるが、同時にRapaport(1959)は「エリクソンの理論は現象学的な命題から極めて臨床的な精神分析的・心理学的な命題まで広範囲な領域にまたがり、それらの間の系統的な区別がなされていない」と述べており、そこに含まれる基本的信頼も概念としてはやや広すぎるものになってしまっているともいえる。

この考え方に続く心理学研究には、Eriksonの理論に基づいて信念としての信頼を心理尺度に落とした上でなされることが多いが、そうした尺度には発達段階ごとに尺度を構成したもの(Rasmussen, 1964; Rosenthal, Gurney, and Moore, 1981)や、基本的信頼のみを尺度化したもの(谷, 1996)などがある。

(3) 信頼を個人内特性として捉えるその他の研究

信頼の概念的定義や信頼が生まれる原因などはあまり問わず、どういう環境で信頼が生じるか、信頼と関わる要素は何か、などのより実際的なレベルを扱った研究もしばしばみられる。ここに分類された研究については、(1)か(2)の何れかに分類する根拠が見当たらなかったため、本論においては便宜上3つ目の観点としてまとめたが、いずれ別の観点として独立する可能性も含むものである。なお、ここに含まれる研究の中にはRotter(1967)の尺度を用いるなど、(1)の立場に近い研究もあるが、単にRotter(1967)の尺度が最も妥当性などが確保されているからそれを用いた、というように信頼概念についての検討があまり十分ではない場合にここに分類した。

この立場に分類される研究としては、まずは信頼の様々な特徴を明らかにしようとした研究として、信頼の性差を検討し女性は男性よりも特性的な信頼が高いとしたFeingold(1994)がある。次に、(1)の研究の流れから派生した研究の中で、尺度により測定された信頼

の高さとの正の相関が見出されたものとしては、「自己開示の量」(Steel, 1991)、負の相関が見られたものとして「心理的援助を求めることへの抵抗感」(Fisher & Turner, 1970)などがある。また、相互交渉過程における互惠性(reciprocity)と信頼が関係していることを見出したPillutla, Malhotra, and Murnighan(2003)や、社会心理学の一つの流れであるストレス・コーピングや、ソーシャル・サポートという観点から信頼を扱ったSchill, Toves and Ramanaiah(1980), Grace and Schill(1986), Buchwald(2003)などもある。

もともと信頼研究が社会的要請もあって盛んになってきている(山岸, 1998; 天貝, 2001)ことがあり、心理学以外の経済学や政治学・社会学の分野からの研究もあった(Akerlof, 1970; Putnam, 1993; Fukuyama, 1995)が、更に心理学と隣接諸分野のコラボレーションともいえる観点からの研究も進められており、例えば「消費者の食品安全性認知と信頼」(Sapp & Bird, 2003), 「犯罪の発生と特性的信頼の高低」(Austrin & Boever, 1977; Wright & Kirmani, 1977), 「被暗示性の高さ信頼」(Pereira & Austrin, 1980), 「特性的信頼とうつ病患者の自殺危険性の予測力の相関」(Lester and Gatto, 1990), 「アルコール依存の親をもつ家族における信頼」(Bradley and Schneider, 1990)などを扱ったものがある。

B. 信頼を関係特性として捉える立場からの研究

関係性は信頼を捉える上で当たり前でありながらも新しい観点といえる。この立場においては、信頼をある特定の関係がもつ特性として扱っており、信頼というよりは信頼関係を扱っている点でこれまでの研究と異なっている。信頼が対象なくして存在しえないことを考えれば、相手との関係を包含するこの観点のもつ意義は大きいと考えられる。

この立場に属するのは、個別の関係における信頼感を測定する尺度の生成を試みたCynthia & Walter(1982), Rempel et al.(1985)などがある。これらの研究では特定の他者を想定させる尺度を用いて個別の関係(specific relationship)における信頼を測定した上で、信頼の因子構造が一般的な特性としての信頼と個別の関係における信頼では異なっていること、信頼の構造が男女で異なっていることなどを指摘している。なお、これらの研究において個別の関係として選ばれている対象は、「とても信頼している同性の人物」(Cynthia & Walter, 1982), 「伴侶または恋愛関係にある人物」(Rempel et al., 1985; Rempel, Ross, and Holmes,

2001)などである。

これら以外に研究対象とされている社会的関係としては、「医者と患者」(Anderson and Dedrick, 1990; Fry and Stones, 1996), 「職場の上司・同僚・部下」(Schindler and Thomas, 1993), 「セラピストとクライアント」(Hlasny and McCarrey, 1980), 「専門家と秘書」(Butler, 1983), 「夫婦」(Johnston and Thomas, 1996)などがある。こうした立場からの研究は、個別の関係にとって重要な要素を見出せる点で有効だと思われるが、現在までのところそれほど十分な数がなされているとはいえず、今後の発展が期待される。

3. 国内の信頼研究

海外と日本では当然ながら社会文化的背景が異なっているため、「信頼」を「Trust」と全く同じものとして単純に考えてしまうことは難しく、わが国ならではの信頼概念の検討が重要になるとと思われる(信頼の文化差に言及しているものとしては、例えば Rothbaum, Pott, Azuma, Miyake, and Weisz, 2000がある)。

そこで国内の先行研究を概観すると、実証的な研究の少なさが目立つ。実際に、2003年9月に学術雑誌論文の目次情報検索システムである FELIX 中の雑誌記事索引を用いた検索を行ったところ、論文タイトルに「信頼」、雑誌名に「心理」を部分一致のキーワードとして入力した場合には152件がヒットした。そのうち、統計的な信頼性や信頼区間に該当するもの(43件)、信頼の対象が組織や概念である場合(3件)、書評やコラム(6件)を除いた100件が本論で扱う範疇に入る論文にあたる。その内訳は実証的研究は25件、75件が記述的論文であった。

実証的研究については、最も系統だった研究を行っているのが山岸らによる一連の信頼研究である(山岸, 1998, 1999; 林ら, 1993; 神ら, 1993; 林, 1995; 垣内・山岸, 1997; 小杉・山岸, 1998; 松田・山岸, 2001; 寺井・森田・山岸, 2003など)。この他には、A-(2)の「信頼=信念」という観点から、天貝(1995, 1997, 1999, 2001など)、杉原・天貝(1996)や谷(1996, 1998)が、A-(3)の観点には一般的信頼感と社会的迷惑行為の関連を扱った吉田・元吉・北折(2000)が、そしてBの関係特性としての信頼という立場に森(1992, 1993, 1994)、中村・浦(2000)や酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村(2002)、水野(2001)などが散見されるのみである。

一方で信頼を扱った研究の75%が記述的論文であったということも特筆に値する点である。これらの論文

は臨床心理や発達心理の専門家が、自身の臨床経験、調査や文献資料などに基づいて考察をしているものであり科学的実証性の検討は不十分である。しかし、現実にはこれだけの言説が存在する以上、それを捨象してしまえば日本における信頼を捉える上で大きな偏りを生み出すと考えられる。そこで本論においては、これらの記述的文献についても含めて整理していくことにする。

A. 国内の実証的研究

まず山岸らによる一連の研究だが、手続きとしては様々に条件を工夫した囚人のジレンマゲームを用いて進められてきており、第2章の言葉を用いれば、「信頼=期待」という観点、社会心理学の観点からの研究ということになる。ただ、山岸(1998)はその研究の中における信頼概念を明確に定義することにより、同じ観点の先行研究などが孕んでいた問題点を解消している。その定義とは、「道徳的社会秩序の存在に対する期待の中の、相手の意図に対する期待のうちで、相手の人格や相手が自分に対してもつ感情についての評価にもとづく部分のみを信頼とする」というものである。こうして定義された「信頼」は、社会的不確実状況において重要になってくる期待であり、社会的不確実状況がない状態を指す「安心」とは区別されるべきであると指摘している。また、主体の持つ期待としての「信頼(=信頼すること)」と相手の性質である「信頼性(信頼に値する行動をとる傾向性)」を区別した上で、従来の信頼研究はいずれも「信頼」が最終的には「信頼性=相手の性質」に還元されることを前提としていると指摘し、それでは日本社会における「安心」は容易に説明できるが、日本人の一般的信頼が低いことや、高信頼者ほど他者の信頼性判断に優れている点を説明できないと述べている。このような定義による一連の研究に基づく提言として山岸(1998, 1999)は「現代社会の問題は、集団主義的社会(安心社会)の崩壊という問題であり、今後は社会関係の解放性と透明性を高めることで、人々が社会的知性を育てる機会を提供するとともに新たな安心を提供するのがよい」と述べている。

一方、「信頼=信念」とする立場の研究に含まれるもののうち、天貝(2001など)はその一連の研究において、Rotter(1967)と Erikson(1959)を統合した「信頼感」概念を提唱している。この信頼感は、①信頼する対象は、自分自身・人一般・特定他者を含む、对人的なものである、②生涯にわたって発達的に変化する、③その獲得は環境に対する能動的選択行為による、という3点

を特徴とする概念であり、「自分自身や他人を、安心して信じていることができるという気持ち」と定義されている。作成された信頼感尺度の因子分析の結果、信頼感に對自的信頼・對他的信頼・不信という3つの下位構造を見出しており、一連の研究の結論として天貝(2001)は個体の発達に応じて信頼感、特にその下位構造同士の関連が変化していくという知見にもとづく信頼感の生涯発達モデルを提唱している。また、基本的信頼感概念を検討した谷(1996, 1998)は、青年期における基本的信頼感を測定し、いくつかの変数を用いた共分散構造分析を行い、結果として「基本的信頼感とは青年期の時間的連続性と強く相関し、それが欠けた際の絶望感を介して、未来への展望に影響を与える」という結果を導き出し、Erikson(1959)が臨床経験やデータから導いた理論が実証的に確認されたと結論づけている。なお、これらの研究はいずれも信頼感を扱っており、信念とはされていないが、それぞれの研究において使用されている尺度の項目文を見る限りでは、それによって測定されるものは「気持ち」というよりは「態度」とか「信念」というべきものだと判断し、この観点に分類した。この観点からの研究を振り返ると、天貝による一連の研究(天貝, 2001など)も結論としては、不信というネガティブな要素が存在し、それを環境などから影響を受けながら克服できることの重要性を主張している点では、むしろErikson(1955, 1959)の理論における漸成発達仮説を、基本的信頼感の部分について実証的に補強した点で評価されるのが妥当かもしれない。

残る研究について、第2章A-(3)の観点にあたる吉田ら(2000)は一般的信頼感と社会的迷惑行為の関連を扱った研究を行う中で、一般的信頼感と社会認識の関係について検討しているが、明確な結果は得られていない。第2章Bの信頼関係という立場からの研究としては、森(1994)が「日常的に交際している友人」、中村・浦(2000)が「父親・母親・大学入学後の友人・旧友」、酒井ら(2002)が「母親・父親・親友」、水野(2001)が「親・親友」をそれぞれ特定の信頼対象として検討している。方法論的にはA-(1)の観点に近い森(1994)は、特定の関係を検討し、「限定的信頼感」が協力行動を促すことを指摘しているが、日常的友人関係が非現実的な課題場面にどれだけ反映されるかが明確ではないため、それ以上の考察がしにくい点が難点といえる。中村・浦(2000)、酒井ら(2002)では、ソーシャル・サポートや学校適応に対して母親・父親・友人がそれぞれ異なる形の相関を示していることを指摘している。し

かしいずれも信頼という概念を試論的に導入したのみという観があり、その測定方法などは曖昧という点が今後の課題とされている。

B. 国内の記述的研究

記述的な論文を概観した場合、まず指摘できるのは用いられている信頼概念の多様性である。しかし、その中でもある程度以上にまとまって見出されるのは、①Erikson(1959)やBowlby(1969, 1973)の理論に基づく基本的信頼感・愛着といった概念についての言説、②信頼の発達や獲得についての言説、③信頼と信用・安心などの用語の使い分けについての言説、④関係性の視点を取り入れた信頼関係という概念についての言説、などである。以下では、これらの言説のうち実証研究では殆ど扱われてこなかった③・④の言説に焦点をあててまとめることにする。

記述的論文においては、しばしば「信用」や「安心」と「信頼」の異同に触れた言説がある。「信用」と「信頼」の違いについて星(1999)は、前者は担保を信じることであり、後者は無担保で相手自身を信じること、と区別している。なお、山岸(1999)も担保がある状態で生じたものは「信頼」ではないとしており、観点としては共通しているといえる。

一方、「安心」と「信頼」についてだが、こちらは概念の異同についてではなく、相関するものとして論じられることが多い。例えば青木(1998)は、信頼感の獲得にあたり「見守られている感覚、安心できる感覚、そして他者と自らを信ずる感覚」を育てることの重要性を指摘している。

次に「信頼関係」という用語についてだが、例えば鈴木(1989)が「行動化されたはたらきかけや、期待を掛け合うなどの精神的なやりとりが日常生活の中で相互的になされている中」で信頼が生まれることを指摘しているように、関係性を既に含む概念として「信頼」を捉えている言説が多くみられる。人間や社会的現象を対象とする信頼を扱う上で、人間同士の相互のやり取りを無視しては成り立たないことが考えられるだろう。

4. 信頼研究の展望

A. 先行研究の問題点

ここまで国内外の信頼に関する主な研究を整理してきたが、信頼研究、その中でも日本における心理学研究の今後を展望するにあたり、まずその問題点を考えてみる。

個々の研究について、「信頼=期待」という観点からの研究においては概念定義とその主張は明確であるものの、実験的手法を用いていることから、Cynthia & Walter(1982)が指摘した生態学的妥当性の確認や、より具体的な提言をしていく必要があるだろう。次に「信頼=信念」という観点については、臨床場面からの経験的な意見にとどまらないためにも実証的研究が必要だと思われる。特に臨床実践などを考えた場合には、Erikson(1959)理論のみに依拠するのではなく、現在という時代にあわせた理論の生成や再編などが必要だろう。また、個人特性として扱っているその他の研究については、引き続き信頼と関連する様々な要素を検討することで、個別具体的な結論を蓄積するとともに、そこで得られた知見を用いて信頼概念の外縁を確定していく姿勢も必要となるだろう。

一方、先行研究を概観した際の問題点として最も重要と思われるのは、信頼概念を捉える統合的視点の欠如である。現実には信頼という概念が多義的に用いられていることには何らかの意味があるのかもしれないが、説明力や現実場面への応用を考えた場合には、信頼という広範な概念のどの部分について論じているのかを個々の研究において明瞭にしていく必要があるだろう。また“どの部分を”ということを明確に示すためには、異なる視点の研究同士をまとめた統合的な信頼概念の整理を行っていくことが重要だと考えられる。

B. 信頼概念の統合

前節において信頼概念を統合することの重要性を指摘したが、ここで Figure 1 に示した分類を見直すと、「その他の個人内特性」の部分と「関係特性」の間、および「期待」と「信念」の間の2箇所であるとわかる。従って今後の統合の方向性を考えるにあたり、この2箇所

の溝をどのようにまとめていくかが問題となってくる。これに対し、本論では(1)に対して「複数次元からのアプローチ」を、(2)に対して「安心」概念を、それぞれ解決の鍵として提案するものである。

(1) 個人内特性-関係特性の差異～複数次元からのアプローチによる統合

信頼概念はその多義性ゆえに、トップダウンの理論的検討には限界があると思われる。従って個別の研究をボトムアップに蓄積していくことで、信頼という概念を表す地図の隙間を埋めていくことが重要になるだろう。また、そのためには現段階での地図を作成していかなければならず、先行研究の整理が不可欠であると思われる。その一つの試みである本論では整理の枠組みとして、「個人内特性・関係特性」という上位分類と、個人内特性の中に「期待としての信頼・信念としての信頼・その他」という下位分類を設ける方法を提案した。「その他」という曖昧なものが含まれていることから分かる通り、本論の分類が完璧なものということはないが、本論で導かれた分類法から指摘できるのは、信頼概念という広範な対象を理解する上で、単次元・単一方向からのアプローチだけではなく複数の次元や方向性からアプローチしていくことが重要だという点である。

複数次元から信頼を捉える研究としては Rotenberg(1994)などもあるが、現状では有効な枠組みとなりえず、文化的差異なども考慮した上でより有効な枠組みを作成することも重要になるとと思われる。これに対して水野(2001)は、従来のトップダウン式に仮説を検証していくアプローチではなく、データに基づいて仮説を立ち上げていく仮説生成型の研究法(質的研究法)を用いることで信頼について検討し、特定対象との信頼関係が「自己」と「関係」という2つの部分に分

Table1 信頼を捉える次元の例

信頼の対象	個別的信頼	一般的信頼
	特定対象に対する信頼	個人の全般的な認知スタイルの傾向を反映した信頼
信頼の根拠	道具的信頼	关系的信頼
	客観的・合理的推論 (担保がある場合の信頼)	関係性に基づく主観的判断 (無担保で成り立つ信頼)
個別-関係	個人特性	関係特性
	個人が持つ態度としての信頼	その関係が持つ性質・特徴

けて認識されていることを見出しており、信頼が個別と関係性のどちらかではなく、同時にそれぞれ認識されていることを示す興味深い結果となっている。こうした知見などを踏まえ、本論では例えば Table 1 に示したような様々な次元から信頼を捉えることを提案するものである。これで信頼概念の全てを尽くしているとはいえないが一つの視点になるだろう。なお、それぞれの次元には様々な種類の信頼があるが、これらは決して相反するものではなく、様々な場面で同時に存在しうるものだと考えられる。このような複数の次元や、質的データの扱いなど含めた複数の方向性からのアプローチを積極的に用いていくことによる信頼概念の統合が期待される。その際に水野(2001)でも用いられている質的研究法の理論的サンプリング(Glaser and Strauss, 1967)の考え方が参考になると思われる。理論的サンプリングにおいては、予め用意された項目に基づく因子分析によりトップダウン方式で次元を見出す方法とは異なり、データに基づいて見出された様々な側面から対象を捉えることで、概念に不足している部分を補っていくことができるからである(Figure2)。

(2) 期待-信念の差異～安心概念に基づく統合

「信頼=期待」という観点の研究においては、安心を含む精神的なものを「信頼の結果得られる利益」に含めてしまい信頼概念からは排除している(山岸, 1998)。一方で「信頼=信念」の観点の実証研究やそれに準じる観点からの記述的論文においては、安心感が信頼にとっての重要な要素であることが指摘されてきている(青木, 1998)。この問題に対して山岸(1998)は「社会的な

確実性が存在しない状態の認知」という意味での安心と一般的な意味での安心とを使い分けている。山岸(1999)のように社会システムを対象とした具体的提言を行っていくためには、前者の安心概念を用いて信頼概念と区別することが重要かもしれないが、一方で個人の発達などに焦点を当てた観点から信頼の発達を扱った研究(Rotenberg, 1980; 天貝, 2001)では幼少時にはより感覚的レベルでの安心が重要であることが指摘されている。そして何より山岸(1998, p.32-33)自身も、様々な信頼に通底するものとして「(一般的な意味で)安心して何かを任せられることができるという点」を挙げている点も踏まえると、「信頼=期待」という観点と「信頼=信念」という観点に共通する要素としての安心が浮かび上がり、この安心概念を明確にしていくことが信頼を統合的に理解するために重要であると考えられるわけである。特に安心は日本においては信頼と非常に近いものとして扱われており、日本の文化特有の要素も考えられることから、国内の信頼研究の中で今後、重要性を増してくるものと思われる。

しかし、「安心」はそれ自体複雑な概念であり、まして「信頼」との概念的兼ね合いとなると、安心できるから信頼するのか、信頼した末に安心が生じるのか、或いはその両方か、など議論は事欠かないが、たとえば前述した水野(2001)では、人との信頼関係が「その関係が安心できる関係だ」という認識を中心に捉えられていること、更に安心が「相手への理解、ありのままの自分でいい、絆の感覚・時間的展望、フィーリング」という4つの要素から成り立っているとの仮説的知見を見出している。こうした研究結果や、先行研究の中

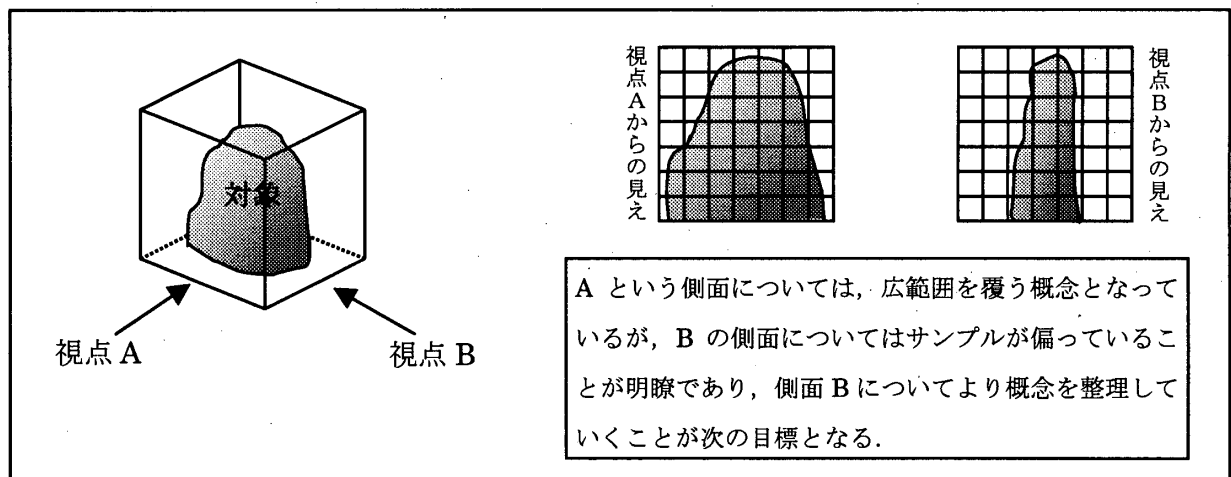


Figure2 理論的サンプリングの考え方

で指摘されてきた点を踏まえると、安心は信頼関係の中で感じられる感覚的・情緒的な部分にあたる重要な要素であると考えられる。実際、“信頼関係”とは言いが、“安心関係”とは言わないことから、信頼が関係の性質を表しうる言葉なのに対し、安心は関係の性質を直接表す言葉ではない可能性が示唆できる。そのように考えると、「信頼」とはそうした「安心」を感じられるような関係全体を指した概念ともいえるかもしれないし、「信頼感」とは「信頼」の中で「安心」に近い感覚的な部分ということができるかもしれない。いずれにせよこれではまだ概念の定義と呼べるようなものではなく、今後より詳細で緻密な検討が不可欠だといえるだろう。

(指導教官 下山晴彦助教授)

引用文献

- Akerlof, G. A. 1970 The market for 'lemons': Qualitative uncertainty and the market mechanism. *Quarterly Journal of Economics*, 84, 488-500
- 青木 紀久代 1998 人への信頼感を育てる(特集 つきあいの苦手な子——人好きな子を育てる家庭), *児童心理*, 52(14), 1377-1381
- 天貝由美子 2001 信頼感の発達心理学, 新曜社
- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響, *教育心理学研究*, 43, 364-371
- 天貝由美子 1997 成人期から老年期に渡る信頼感の発達—家族および友人からのサポート感の影響—, *教育心理学研究*, 45, 79-86
- 天貝由美子 1999 一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因, *教育心理学研究*, 47, 229-238
- Anderson, L. A. and Dedrick, R. F. 1990 Development of the trust in physician scale: a measure to assess interpersonal trust in patient-physician relationships, *Psychological Reports*, 67, 1091-1100
- Austrin, H. R., and Boever, P. M. 1977 Interpersonal—trust and severity of delinquent—behavior, *Psychological Reports*, 40(3), 1075-1078
- Barber, B 1983 *The logic and limit of trust*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss: Vol. 1, Attachment*. New York: Basic Books
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol. 2, Separation*. New York: Basic Books
- Bradley, L. G., and Schneider, H. G. 1990 Interpersonal trust, self-disclosure and control in adult children of alcoholics, *Psychological Reports*, 67, 731-737
- Buchwald, P. 2003 The relationship of individual and communal state-trait coping and interpersonal resources as trust, empathy and responsibility, *Anxiety Stress and Coping*, 16(3), 307-320
- Butler, J. K. 1983 Reciprocity of trust between professionals and their secretaries, *Psychological Reports*, 53(2), 411-416
- Chun, K. T. & Campbell, J. B. 1974 dimensionality of the Rotter Interpersonal Trust Scale. *Psychological Reports*, 35, 1059-1070
- Cynthia, J. G. & Walter, C. S. 1982 Measurement of specific interpersonal trust: construction and validation of a scale to assess trust in a specific other, *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 1306-1317
- Dawes, R. M., McTavish, J., & Shaklee, H. 1977 Behavior, communication and assumptions about other people's behavior in a commons dilemma situation, *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 1-11
- Deutsch, M. 1958 Trust and suspicion, *Journal of Conflict Resolution*, 2, 265-279
- Erikson, E. H. 1955 *Childhood and Society*. W. W. Norton, New York, 仁科弥生訳, 幼児期と社会 1980 みすず書房
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle (selected papers of E. H. Erikson)*. Int. Univ. Press, New York 小此木啓吾編訳, 1973自我同一性 誠信書房
- Erikson, E. H. 1982 *The lifecycle completed: A review*. W. W. Norton, New York, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989 ライフサイクル, その完結. みすず書房
- Feingold, A 1994 Gender Differences in Personality — A Metaanalysis, *Psychological Bulletin*, 116(3), 429-456
- Fisher, E. H., & Turner, J. L. 1970 Orientations to seeking professional help: Development and research utility of an attitude scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 35, 79-90
- Fry, R. P. W., and Stones, R. W. 1996 Hostility and doctor-patient interaction in chronic pelvic pain, *Psychotherapy and Psychosomatics*, 65(5), 253-257
- Fukuyama, F. 1995 *Trust: The social virtues and the creation of prosperity*. Glencoe, IL: Free Press.
- Giffin, K 1967 The Contribution of studies of source credibility to a theory of interpersonal trust in the communication process, *Psychological Bulletin*, 68(2), 104-120
- Gilligan, C. 1982 *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 岩男寿美子監訳 もうひとつの声: 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ 1986 川島書店
- Glaser, B and Strauss, A. L. 1967 *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Aldine Publishing Company, Chicago. 後藤隆・大出春江・水野節夫訳 1996 データ対話型理論の発見 新曜社
- Grace, G. D., and Schill, T. 1986 Social support and coping style differences in subjects high and low in interpersonal—trust, *Psychological Reports*, 59(2), 584-586
- 林直保子 1995 繰返しのない囚人のジレンマの解決と信頼感の役割, *心理学研究*, 66(3), 184-190
- 林直保子・神信人・山岸俊男 1993 ネットワーク型囚人のジレンマ—戦略のシミュレーション. *実験社会心理学研究*, 8, 33-43
- Hlasny, R. G. and McCarrey, M. W. 1980 Similarity of Values and Warmth Effects on Clients Trust and Perceived Therapists

- Effectiveness, *Psychological Reports*, 46(3), 1111-1118
- 星一郎 1999 アドラー心理学に学ぶ 自分を好きといえる子に育てる20の知恵(2) 他者を信頼するという事, 児童心理, 53(2), 263-269
- 神信人・関谷直保子・篠塚寛美 1993 ネットワーク型囚人のジレンマの実験的研究—PD関係におけるコミットメントの形成, 実験社会心理学研究, 33, 21-30
- Johnston, S. G., and Thomas, A. M. 1996 Divorce versus intact parental marriage and perceived risk and dyadic trust in present heterosexual relationships, *Psychological Reports*, 78(2), 387-390
- 垣内理希・山岸俊男 1997 一般的信頼と依存度選択型囚人のジレンマ, 社会心理学研究, 12, 212-221
- Kaplan, R. M. 1973 Components of Trust: note on use of Rotter's scale. *Psychological Reports*, 33, 13-14
- Kollock, P. 1994 The emergence of exchange structures: An experimental study of uncertainty, commitment, and trust. *American Journal of Sociology*, 100, 313-345
- 小杉素子・山岸俊男 1998 一般的信頼と信頼性判断, 心理学研究, 69(5), 349-357
- Lester, D., and Gatto, J. 1990 Interpersonal trust, depression, and suicidal ideation in teenagers, *Psychological Reports*, 67, 786
- Luhmann, N. 1979 *Trust and power*, Chichester, U. K. : Wiley
- 松田昌史・山岸俊男 2001 信頼と協力—依存度選択型囚人のジレンマを用いた実験研究—, 心理学研究, 72(5), 413-421
- 水野将樹 2001 友人との間に形成される信頼関係についての研究—そのプロセスと構造について—, 東京大学大学院教育学研究科2001年度修士学位論文(未公開)
- 森久美子 1992 社会的ジレンマにおける信頼感とコミュニケーションの効果, 日本グループダイナミクス学界第40回大会発表論文集, 131-132
- 森久美子 1993 信頼感測定の試み, 日本心理学会第57回大会発表論文集, 62
- 森久美子 1994 囚人のジレンマゲームにおける信頼感とマキャヴェリアニズムの効果—協力率および選択動機との関連, 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 41, 65-78
- 中村佳子・浦光博 2000 ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について—対人関係の継続性の視点から—, 社会心理学研究, 15(3), 151-163
- Pereira, M. J., and Austrin, H. R. 1980 Interpersonal trust as a predictor of suggestibility, *Psychological Reports*, 47, 1031-1034
- Pillutla, M. M., Malhotra, D., and Murnighan, J. K. 2003 Attributions of trust and the calculus of reciprocity, *Journal of Experimental Social Psychology*, 39(5), 448-455
- Putnam, R. D. 1993 The prosperous community: Social capital and public affairs. *The American Prospect*, Spring, 35-42
- Rapaport, D. 1959, in Erikson, E., *Identity and the Life Cycle. Selected Papers. With a Historical Introduction by David Rapaport.*, Int. Univ. Press. New York (※訳文は次を参照… Erikson, E. H., 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989 ライフサイクル, その完結. みすず書房)
- Rasmussen, J. E. 1964 The relationship of ego identity to psychological effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815-825
- Rempel, J. K., Holmes, J. G., & Zanna, M. P. 1985 Trust in Close Relationships, *Journal of Personality and Social Psychology*, 49(1), 95-112
- Rempel, J. K., Ross, M., and Holmes, J. G. 2001 Trust and Communicated Attributions in Close Relationships, *Journal of Personality and Social Psychology*, 81(1), 57-64
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M., and Moore, S. M. 1981 From trust to intimacy — a new inventory for examining Erikson stages of psycho-social development, *Journal of Youth and Adolescence*, 10(6), 525-537
- Rotenberg, K. J. 1980 "A Promise Kept, a Promise Broken": Developmental Bases of Trust, *Child Development*, 51, 614-617
- Rotenberg, K. J. 1994 Loneliness and trust. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 13, 152-173
- Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., and Weisz, J. 2000 The Development of Close Relationships in Japan and the United States: Paths of Symbiotic Harmony and Generative Tension, *Child Development*, 71, 1121-1142
- Rotter, J. B. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust, *Journal of Personality*, 35, 651-665
- Rotter, J. B. 1971 Generalized expectancies for interpersonal trust. *American Psychologist*, 26, 443-452
- Rotter, J. B. 1980 Interpersonal trust, trustworthiness, and gullibility. *American Psychologist*, 35, 1-7
- 酒井厚・菅原ますみ・眞築城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応, 教育心理学研究, 50(1), 12-22
- Sapp, S. G. and Bird, S. R. 2003 The effects of social trust on consumer perceptions of food safety, *Social Behavior and Personality*, 31(4), 413-421
- Schill, T., Toves, C., and Ramanaiah, N. 1980 Interpersonal—Trust and Coping with Stress, *Psychological Reports*, 47(3), 1192-1192
- Schindler, P. L. and Thomas, C. C. 1993 The structure of interpersonal trust in the workplace, *Psychological Reports*, 73, 563-573
- Steel, J. L. 1991 Interpersonal correlates of trust and self-disclosure, *Psychological Reports*, 68, 1319-1320
- 杉原一昭・天貝由美子 1996 特性的および類型的観点からみた信頼感の発達, 筑波大学心理学研究 18, 129-133
- 鈴木葉子 1989 子どもへの「信頼」・大人への「信頼」——「信頼」の相互性(子どもとの信頼関係<特集>), 児童心理, 43(4), 538-545
- 谷冬彦 1996 基本的信頼感尺度の作成, 日本心理学会第60回大会発表論文集, 310
- 谷冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望, 発達心理学研究, 9, 35-44
- Tedeschi, J. T., Heiter, D. & Gahagan, J. P. 1969 Trust and the prisoner's dilemma game. *Journal of Social Psychology*, 79, 43-50
- 寺井滋・森田康裕・山岸俊男 2003 信頼と継続的關係における安心:

リアルタイム依存度選択型囚人のジレンマゲームを用いた実験研究

Tyszka, T., & Grzelak, J. L. 1976 Criteria of choice in non-constant-sum games. *Journal of Conflict Resolution*, 20, 357-376

Wright, T. L., and Kirmani, A. 1977 Interpersonal-trust, trustworthiness and shoplifting in high-school, *Psychological Reports*, 41(3), 1165-1166

Wrightman, L. S. 1966 Personality and attitudinal correlates of trusting and trustworthy behaviors in a two-person game. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 328-332

Yamagishi, T., & Sato, K. 1986 Motivational bases of the public goods problem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 67-73

山岸俊男 1998 信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム—, 東京大学出版会

山岸俊男 1999 安心社会から信頼社会へ, 中公新書

吉田俊和・元吉忠寛・北折充隆 2000 社会的迷惑に関する研究(3)—社会考慮と信頼感による人の分類と迷惑行為との関連—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 47, 35-45